

暉峻義等と医学史研究

— 奨進医学会および日本医史学会とのかかわりを中軸に —

岡田 靖雄

一、はじめに

暉峻義等（てるおかぎしやう一八八九—一九六六）は日本に労働科学を確立した人である。今回日本医史学会第一〇〇回総会記念誌の編集に参画して、本学会の前身奨進医学会のことをしらべていて、暉峻が奨進医学会にふかくかかわっていたことがわかったので、その点を中心に記しておきたい。

暉峻は労働科学研究所をつくった進歩的な先輩だが戦争協力のくらい影をおっている、というのが、わたしの一般的な印象であった。条件反射研究会などの場で何回かお会いしている。眼光の鋭い、しまった顔の、やせた方であった。この人に、小田急沿線のお宅によべたことがある。廊下で藤椅子にすわっていて、後に秘書の岩崎繁野がたつていたことを記憶している。用件は、暉峻が一九五〇年に設立した健康社会建設協会（略称健社建）の世話をしてほしいということだったろうか。年譜をみると、一九六二年に脳軟化発病とあるので、この年だったか。わたしは一九五八年に都立松沢病院にうつり、病院改革運動にとりくんできた当方で、この要請をうける余裕はなかった。

この人のあたらしい面をみいだして、感慨なきをえない。

二、略歴

暉峻の伝記は三浦豊彦によりかかれて⁽¹⁾いるので、これによって略歴をみておこう。

暉峻は一八八九年（明治三二年）九月九日、暉峻光浄・はるの第一子として兵庫県伊保村（現・高砂市）にうまれた。父は浄土眞宗本願寺派僧侶で、仏教中学の校長であつた。父は、四歳の義等に浄土三部経を暗誦させるなど、きびしい詰め込み教育をした。このことがかれを反抗的青年にした。高砂市は瀬戸内海に面しているが、暉峻は中学時代は日本海にちかい豊岡中学で寄宿舎生活をおくつた。一九〇八年に豊岡中学を卒業すると、鹿児島⁽²⁾の第七高等学校造士館に入学した。鹿児島には祖父普瑞が浄土眞宗の僧侶としてすんでいた。

一九一〇年七月に第七高等学校を卒業して、同年九月東京帝国大学医科大学に入学（旧制高等学校は三年制だったので、年譜の年はどこかで一年ちがっている）。医科大学の講義はあまりおもしろくなく、文科で元良勇次郎の心理学講義をきいて関心をもつた。生理学の大澤謙二教授および永井潜助教授の講義は医学への興味をかきたてた。ところが、二年生になつて一九一一年一月クラス会でよつた暉峻はひどく熱発した。このときかれが受診したが、本郷区千駄木にすむ尼子四郎（かれは夏目金之助家の家庭医でもあつた）で、尼子は、肺炎がわるい、学問はやめてすぐに家にかえるように、とすすめた。暉峻はすぐに解剖、生理、生化学などの原書をうつて、郷里にちかい須磨療養所に入院した。そこに半年いると、もう菌はでないといわれた。暉峻はそこをでると法隆寺に小僧扱いですみこみ、仏事の手伝いもできるようになり、健康は完全に回復した。半年してそこをでて鹿児島へいき、桜島の住職のいなくなった寺にすみこんだ、一九一三年のことである。暉峻はここで仮住職兼社会事業主事の仕事をした。

東京へもどる気になつて一九一四年一月一〇日に鹿児島をたつたが、一月一二日に桜島が大爆発して暉峻がすんでいた有村の温泉場も壊滅した。暉峻は友人たちにすすめられて医科大学に再入学したが、ちがつた級にはいると親しみが

なく、講義にはでたり、でなかつたりだった。青山胤通監修の『日本内科全書』は一九一三年三月から刊行されたが、編集にあたったのは、宮本叔、林春雄、富士川游、尼子四郎であった。四年生のとき暉峻は、学校にあまりでずに暇がありそうだからと、この編集をてつだわされて、それでかなりの金をもらった。

一九一七年(大正六年)一二月に医科大学を卒業。同級生には、東京都知事をした東龍太郎、千葉医科大学の眼科教授をして医学史にも力を入れた伊東彌恵治、慶應義塾大学の内科教授をした大森憲太、東京大学の病理学教授をした岡治道、岡山大学の衛生学教授をした緒方益雄、日本精神病院協会をつつた金子準二、名古屋大学の衛生学教授をした鯉沼茆吾、愛知県立精神病院長をした児玉(岡崎)昌、東京大学の内科教授をした佐々貴之、細菌学をおさめて内務省衛生局にはいり昭和医科大学教授もした佐藤正、東京大学の放射線科教授をした都築正男、新潟大学の外科教授をした中田瑞穂、梅毒の村田反応の発見者村田正太(まさたか)(一八八四—一九七四)、老年医学を研究した渡邊定がいる。

暉峻は、助教授時代の生理学概論にひかれた永井潜(一八七六—一九五七)の生理学教室にはいり、炭酸ガス合成を研究主題としてあたえられた。文献をよみ実験をはじめようというときに、永井が有馬頼寧からの依頼をもつてきた。浅草の橋場でひらく労働者学校で週二回講義をしてくれとの話である。暉峻はそこで日本人の生理につき講義した。

内務省の保健衛生調査会官制は一九一六年六月に公布された。その委員には横手千代之助、富士川游、永井潜も任命された。農村衛生・地方病・風土病をとりあげたその第七部は、生理学専門家を東京帝国大学医科大学生理学教室にもとめてきた。そして、一九一八年五月永井におされた暉峻がいくことになった。暉峻は委員の柳澤保恵、横手、永井などと静岡県、山梨県を視察したが、府県の担当者でないので内務省から直接いっても調査はできなかった。そこで暉峻は警視庁囑託となって東京市の細民窟(本所、深川など)を調査することになった。五、六名の助手と女医一名との協力をえたが、暉峻は細民長屋にとまりこんだ。この調査には五月から六か月かかった。また暉峻は、この年の一二月に東京帝国大学法科大学生を中心に結成された新人会に参加しており、医科から参加した最初の一人であった。

大原孫三郎（一八八〇—一九四三）は一九一九年二月九日には大原社会問題研究所を、同二月二日には大原救済事業研究所を設立し、九月二日には両者を合同させた大原社会問題研究所が設立された。暉峻には細民窟調査中に大原からの誘いがあり、かれは社会医学研究部門の研究者としてここに入所した。研究所の建物が一九二〇年七月に完成するまで、暉峻は生理学教室で人の反応時間の実験をおこなっていた。一九二〇年一二月には大原社会問題研究所から社会衛生部門が独立し、一九二二年七月一日には倉敷紡績株式会社工場敷き地内に完成したその建て物が倉敷労働科学研究所として披露され、暉峻がその所長となった。「労働科学」の名称は、医学と心理学とを主軸とする、労働と生活とに關する生物学的研究の意味でえらばれた。心理学者との協力について暉峻は富士川に相談にいつて、富士川の親戚の桐原葆見を紹介された。

研究所竣工につづいて七月一日に暉峻はヨーロッパ留学にたった。研究用器具を購入する用もかねてである。ベルリン大学の労働生理学研究所（Lubner教授）および社会衛生学教室（A. Grofalan教授）の抄読会・研究科会・ゼミナールをききながら、測定機械や図書を購入していた。大量に本をかいこんでいる暉峻のところ在一九二二年六月に、ゲッチンゲン大学図書館で一五—一八世紀の文献を手ばなそうとしているとの話がもちこまれた。暉峻は、大原社会問題研究所の森戸辰男、さらにライプツィヒ大学医学史学のズートホフ教授（K.F. Sudhof）、ギリシア語・ラテン語に通じている兼常清佐にみてもらったうえで大原の了解をえて、一〇月一六日にゲッチンゲン大学と売買契約をむすんだ。ハーヴェイの血液循環に關する原著がとくに暉峻の関心をひいていた。このゲッチンゲン医学古典文庫は川崎市の労働科学研究所図書館に收藏されていたが、一九九九年二月に倉敷中央病院に移された。暉峻の師である永井はゲッチンゲン大学でフェルボルン（Max Verworm）に生理学をまなんでいたが、暉峻は論文別刷りを中心にしたフェルボルン文庫も書店で購入し、これも労働科学研究所図書館におさめられている。

暉峻は一九二三年（大正一二年）一二月に帰国し、研究所を充実させ労働科学の研究にとりくんだ。一九二四年には、

幕末の岡山藩金川の医師難波抱節が所蔵していた「温知堂文庫」を購入した。労働科学研究所図書館に収蔵されているこれについては、三浦豊彦の報告がある。

このあとの経歴はごく簡単にする。一九二四年五月に暉峻は医学博士の学位をえたが、これは藤根常吉(不忘、奨進医学会・日本医史学会の役員をずっとしていた医療ジャーナリスト)が暉峻にはしらせずに、一九一九年に暉峻が八王子でおこなった調査をまとめた「乳児死亡の社会的原因に関する考察」(一九二二年)を学位論文として提出したものである。六月には研究所の機関誌として『労働科学研究』を発刊した。一九二七年一月には『社会衛生学―社会衛生学上に於ける主要問題の論究―』がだされた。ここで暉峻は、民族衛生学が衛生学の根本問題だとしている。一九二九年二月一日には、産業医の全国的な会として産業衛生協議会(日本産業衛生学会の前身)が創立されて、暉峻が理事長になった。この暉峻は社会医学のかがやかしい先達の一人であった。

倉敷労働科学研究所は一九三〇年に、綿業不振のため倉敷紡績株式会社から社長大原孫三郎個人の経営にうつされた。大原側がこの負担をいつまになえるかという問題があり、暉峻は日本の労働科学研究所とすることを目ざしていた。一九三五年にだされた岩波全書『社会衛生学』は、同名の前著にくらべると民族衛生学への傾斜をなおつよめたものであった。一九三七年(昭和二年)一月に労働科学研究所は東京に、財団法人労働科学研究所として発足した(所長暉峻)。戦時体制が強化されていくなかで、暉峻はその企画性をかわれて、多くの役職にひっぱりだされた。一九四〇年一月に労資一体の大日本産業報国会が結成され、翌年六月暉峻はその常務理事となり、同一〇月には労働科学研究所は大日本産業報国会に統合された。この頃には所員の何人かはこういった方向に疑問を感じて退職した。大日本産業報国会は一九四二年六月には大政翼賛会の傘下団体となった。一九四四年、大政翼賛会常任参与、同国民運動局長(九月にはそれを退任)。

敗戦になり一九四五年(昭和二〇年)九月三〇日には大日本産業報国会はいちはやく解散させられ、労働科学研究所も

解散になった。同年一月には財団法人労働科学研究所が再建されて、暉峻所長。彼は一九四六年八月三一日づけで公職追放該当指定をうけ、一九四八年二月七日付けで正式に公職追放に指定された。ともに公職ではなかったが、暉峻は一九四七年一月には日本産業衛生協議会理事長を辞任し、また一九四八年一月には労働科学研究所長の退任におこまれた。この後暉峻は権力をはなれた運動を目ざして一九五〇年五月には健康社会建設協会を設立し、その理事長になった。また労働条件・生活条件の調査研究活動をつづけるとともに、産業衛生面での国際交流にもとりくんだ。

暉峻は一九六二年四月下旬にかかる脳軟化症を発し、八月に再発作があつた。その後はかなり回復して、一九五二年八月に顧問に就任していた労働科学研究所の顧問室に毎日のようにでてくるようになった。しかし言語の不調はつづいていて、仕事はできなかつた。そして一九六六年一月七日永眠、七七歳。

三、奨進医会とのかわり

まず奨進医会の歴史をごくかいつまんでみておこう。富士川游の父富士川雪すず(一八三〇—一八九八)は一八七六年(明治九年)七月に、医人の風紀が頹廃にかたむくのをなげいて、安芸国沼田郡安村において學術研鑽団体として近村開業のものをあつめて有志医会を発足させた。それは一八七九年一月に奨進医会と名づけられた。富士川游(一八六五—一九四〇)は、一八八七年七月に広島県病院附属医学校を卒業するとその秋に上京して、原田貞吉の『中外医事新報』の編集をまかされることになった。一八八九年四月に『私立奨進医会雑誌』が創刊される。このとき私立奨進医会(雑誌創刊と同時に、会名に私立がくわわつた)の事務所は広島県沼田郡長楽寺村におかれていたが、事務所は間もなく東京に移る。『私立奨進医会雑誌』は一八九二年二月に第四年第一号をだしておわるが、この段階での会の活動は學術研鑽と医道の追求とにあつて、医学史に関するものはほとんどない。私立奨進医会は一八九二年(明治二十五年)三月に先哲祭をおこない、これは翌年次回から医家先哲追薦会と改称されて、会の年中行事となる。そして会の機関誌としては一八九三年六月に

『医談』が発刊されて、一九〇八年一月の第一四・一一五合併号にいたる。医人の風紀の保持、医術進歩の裨益、皇国医道の沿革をさぐり前賢諸家の偉行を顕揚することが、この会の趣旨とされている。なお一九〇一年三月には会の名称から私立がとれて、もとの奨進医会にもどっている。

奨進医会はつづいて一九〇九年八月から機関紙として『刀圭新報』をだす。その内容は学術研鑽、医道、医学史がおおきな柱で、『医談』時代とおなじであった。奨進医会は一九一三年九月に医業法律研究会をおこない、これから医業に関する法律問題が誌面でも重視されてくる。法学士山崎佐の登場もおなじ頃である。奨進医会内で準備がすすめられていた医師共済団体としての日本医師協会は一九一五年一月に成立する。奨進医会と日本医師協会とは趣旨をことにするものの、役員は両者共通といってよい。人の面からすれば、一つの団体の両面というほうがよいかもしれない。

さて、略歴でのべたように、一九一四年に再入学した暉峻は四年生のときに(一九一六—一七年だろう)『日本内科学』の編集を手つだった。編集者の一人尼子四郎がかれの肺結核を診断した縁からであろう。暉峻自身は、「学生中には四年のときに、お前、どうも学校に出ないで閑がありそうだというので、内科全書の編集を手伝わされました。編集会議には、いつも富士川(游)先生、また当時富士川先生を中心に奨進医会という医の倫理と歴史の研究を中心とする会がありました。この会の機関雑誌に『奨進医会雑誌』というのがあって、主として先生たちの原稿の催促です」とかたる。暉峻が『奨進医会雑誌』といっているのは、『刀圭新報』のことである。これで暉峻の編集の才が見こまれたのだろう、『刀圭新報』ににわかには暉峻が登場する。まず誌面でかれの活躍をおつていこう。

『刀圭新報』の表紙はずっと、ダニエル・クレルクの『医学史』の扉絵からとられた、中央に医神アスクレピオスを配した絵であったが、一九一八年(大正七年)一月二〇日発行の第九巻第五号から、レンブラントの解剖図の下絵(富士川にねがってえたもの—暉峻)が表紙をかざることになる。この絵の下にある「内容」には、「巻頭言／暉峻、非医者問題／富士川、新領土の医術／平安、「穩姿」と云ふ文字／高田、医学上国字国語使用問題／小川、医人伝／久保・岡崎、詩歌

其他」とある。これからも『刀圭新報』の内容が、社会医学、現代医学・医療批判におおきくかわったことが察せられる。「巻頭言 編輯を担当するにあたりて」⁽⁴⁾で暉峻は、「吾等は医道を良心の道程に建てんとするものである」と⁽⁵⁾奨進医学会の主旨を要約し、また「医者も、もつとまじい、を尊重する時代に遭遇するにちがいない」という。「編輯のあと」⁽⁵⁾には、「日本の医者はちつとも診察室以外に眼がとどかない日本の社会は根本的な純医学上からの社会批判が欠けて居る〔中略〕私は心ある医家の奮起を希ふものである」と暉峻はかく。このとき暉峻は前年末に医科大学を卒業したばかりであった。

「医学に於ける国字国語使用に就いて」⁽⁶⁾をかけた小川劍三郎（一八七一—一九三三）は、岡山医学専門学校教授もした眼科医で、当時東京で眼科を開業していた。眼科史をはじめ医学史を研究しており、奨進医学会員であり日本医師協会の評議員でもあった。表題についての小川の説は、「かゝる問題に就いては、最早論議の余地のないほどに明白なことである。その医学上たると否とに關せず、日本人が、その国語を用ひて學術の進歩を促進せんとするに、異議の起る可き理由はない筈である。当然然る可きことである。／外国語を使用せざれば學術の發達を害するものである、独逸語にあらざれば日本の医学は根柢をあやうくすると云ふ様な馬鹿げた論者に毫も耳を貸すの必要はない。吾々は日本の医学を所有せねばならない。」という冒頭の九行につきる。さて、この号の奥付けで編輯者兼発行人は暉峻義等になっており（それまでは岡崎桂一郎）、またその上段には「急告 今般奨進医学会事務所並刀圭新報發行所ヲ左記ニ移シ申候／東京市下谷区桜木町三十八番地暉峻義等方／追テ会費、原稿及ビ交換雜誌等總テ右へ御送附被下度候」とのつていいる。

暉峻編集による『刀圭新報』のうち、小川にはじまる医学用語問題をおつていこう。第九卷第六号の藤浪鑑「學術と國民と國語」⁽⁸⁾は、「學術は固より万国的である、されども學術を扶植するものは常に國民である」として、「凡て國民の言葉を以て医学を述べ又語る可きでえある。此事は現在、他の国々にて行はれてゐるところであつて、我国にても亦然らざるを得無い」とし、最後に医語を整理するを必要をといっている。つづく第九卷第七号、同第八号の村田正太「医界用

語問題」⁹⁾は、解剖学の大澤岳太郎が「医学と語学」(日本医事週報、第二一八六号、一九一八年)で、ドイツ語に日本語のテニヲハをつけた文章でいいじゃないか、といったのを徹底的に批判した。第九卷第九号にのつた大澤岳太郎「医学用語問題」¹⁰⁾は村田への反論で、村田のいう「光荣ある日本の医学」にろくなものはない、漢字の不便はいうまでもない、国語を尊重すべきはもちろんだが医学社会では便法の使用もゆるしてもらいたい、医学と国家とは別物であつて、敵・味方の区別をしない医学にあつて言語という障壁をつくつて故意に疎隔すべきではない、という。第一〇号で村田は大澤にまた徹底的に反論している。第九卷第一二号で村田は「東京医科大学受験用語に就て」¹²⁾で、病床日誌をドイツ語でかくのが内規であるとして、これを教授会で確認しようとしている内科教授を批判している。これは実は、卒業試験のと き村田は日本語でかいた病床日誌を提出したところ、入澤教授が試験をうけさせないとしたのを、暉峻が、村田は外国語学校でドイツ語を専攻し『医学ドイツ語独習』という著書さえある男だ、¹³⁾とといて、村田の再試験―卒業の道をひらいた、という経験があつたのである。第一〇巻第四号(一九一八年二月)では土肥鶚軒(慶藏)が、第三号の村田の文章中にとりあげられたことについて、「便毒の語の出処に就て村田学士に答ふ」¹⁴⁾の文章をのせている。そこでは、村田の指摘に感謝したのち問題の用語の出処をくわしくのべている。

これらのほかにも、村田、暉峻ほかによる当時の医学界の権威に批判的な文章がづづいてきた。編集後記から暉峻のことばをひろつていくと、「奨進医学会も、もつと街頭に出なくてはならない時代になつて来た」(第九卷第六号)。「刀圭新報は一月号から他、少編輯の方針が変更されたのです。もつと社会的な重要問題にふれ、もつと医師の日常生活に肉迫して行ふと云ふ使命を雑誌は負ふことになつたのであります」(第九卷第七号)、「第五回日本医学会の様子を見たものは、きつと心細かつたことゝ思ふ。ほんの少数の人達が學術のために、人類のために骨折つてゐるのであつて、大多數の医家は、まだ利慾にとまどつてゐるのだと云ふことが、あれほど明かに証言されたものはない」(第九卷第八号)、「その内村田と私が発起になつて、在京の青年有志を会同して大いに医界の有害分子のぶつこはしにかゝりたいと種々計画してゐ

る。極く善良に至誠を以てやる」(第九卷第一〇号)¹⁸、「来年からはもつと濃厚に、もつと劇烈に大胆に私達の主張を通し切りたいと思ふてゐる」、「それにしても志賀博士の態度がよくない。〔中略、感作結核ワクチンの件〕科学者の価値は科学的道徳によつて定まる」(第一〇卷第四号)¹⁹。

こういふなかで暉峻は富士川への敬意は持しつづけている。「『東京で少くとも十五年は苦勞せよ』こふ富士川博士はもう二三度宣告された。僕は『苦勞せよ』と後進に呼ぶ先輩の温情を感じ泣いて享受するものである。僕はこの情味ある忠告を僕の敬愛する友の凡てに分ちたい。僕は富士川博士のこの温情に対しても、あくまで奮闘をつゞけたい熱望に燃えてゐる」(第一〇卷第四号)²⁰。編集会議には富士川、藤根その他の先輩も出席していたようである。「世の中のわからず屋のやることを言ふことを少し茶化してやろうぢやないか」との先輩の声もあったが、「眞向から切り込むことが最も有効である」(同号)²¹。富士川は何回か、あせらずにゆつくりすもう、と忠告していたようである。

年あけて一九一九年一月二〇日発行の第一〇卷第五号は、二六ページ中に日本医師協会関係が七・五ページを占めているほかは、全体の基調はかわらない。第一〇卷第六号は、表紙の題字の上に「日本医師協会機関誌」とはいる、内容は日本医師協会関係および医事法制と前号までの暉峻路線とで半半である。編集者は暉峻のままだが、発行人は小田平義となっている。このあとの号からは内容は日本医師協会の線である。編集者としての暉峻の名がいつ消えたかは、奥付けのそろつた雑誌がかけていて、確認できていない。いづれにせよ、あるときから編集者兼発行者は小田平義となつた。²²

このあたりのことを、日本医師協会の立ち場から山崎佐が「医家先哲追薦会四十五年日本医師協会二十年記念特輯」²²にかいてるところによつてみよう。この特輯は、まず医家先哲追薦会の毎回についてのべ、ついで「奨進医会回顧」で一九一四年三月四日までを述べ、ついで「日本医師協会回顧」で一九一四年四月四日の日本医師協会創立発起人会からをのべている。一九一四年四月からの奨進医会の活動は、日本医師協会の活動といりまじつた形でのべられているのである。ともかくも、関連部分をぬきだしてみよう――

大正六年

〔中略〕

本年も、毎月一回づゝ談話会を開催し、刀圭新報も引続き毎月二十日発行して来たのであつたが、本会の発展を期するため、此際新進気鋭の者を選んで、実際の事務を委ね、面目を一新する方がよからうとの議が、漸次熟して、次年度より、此方針に向ふことゝなつた。之が本会として第一回の大改革であつた。

大正七年

昨年暮の評決に依つて、本年より、本会の事務は、小川劍三郎氏主裁の下に、新たに学窓を出で、未だに元氣旺盛である。暉峻義等、村田正太、佐藤正等の諸氏が担当することになつて、刀圭新報第九卷第五号より、是等の方々が編輯することになり、雑誌の体裁内容及び会務の状態も非常に變つたのである。

大正八年

本会は、医師の倫理、道義を会是として、医師の風紀を矢蓋しく論じて、その一の現はれとして、医家先哲の追薦に努力して来たのであつたが、又中には、斯の如きは、老人の閑事であつて、現代の医師には、全く符合せぬ時代遅れであるとの非難も相当あつたので、大正六年十二月、役員会に於て、本会の事務一切を挙げて新進気鋭の新しい若い方々に委ねたのであつた。しかるに、此新しい変革といふものは、本会の趣旨に反するとか、かくては、本会の特色は失はれて仕舞つた。本会の伝統的精神を失つたのは怪しからぬといふ非難も高まつて、それならば、本会に留まる必要がないとして、退会する者が、段々多くなつて、本会の基礎を危くするやうになつた。茲に於て、一月二十五日、神田明治会館に、委員会を開いて、色々将来の方針につき協議し、小川氏を始め新進の方々は手を引き復た元の如き組織を以て本会の事務を行ふことになつた。新しい変革も、僅か一年にして終つたのである。

同夜は本会の革新について重大の委員会のことゝて、片山会頭の外二十三名の多数出席した、富士川理事より、弔

慰部につき、〔下略〕

この文章でまず注目しなくてはならないのは、「本会」の内容があまりないことである。「本会」はずっと奨進医学会のこととしてよめるが、「弔慰部」とでくると、そこは日本医師協会である。察するに、人の面では一体であった奨進医学会と日本医師協会は、日本医師協会の確立拡充に全力をそそいでいた。奨進医学会は看板だけになりかけ、その看板をかかげている力もたりにくくなった。そこで暉峻らに、雑誌の編集から奨進医学会の事務までゆだねてみた、ということだろう。「小川劍三郎氏主宰の下に」とあるが、『刀圭新報』の誌面からは小川主宰という姿はみえてこない。また村田は「この論戦のために奨進医学会のほとんど万年幹事を引き受けておられた〔大澤〕教授は大いに憤慨し幹事を断わってしまった」とかいている。当時の奨進医学会の役員は記録されていないので、ほかにどんな人が退会したかはわからない。また大澤は日本医師協会の役員にはなっていないから。一九一九年一月二五日の委員会決定は、小川一派追放といったものではなかった。のちにのべる『医人』の第八号には、「三日には小川さんの処で奨進医学会の先哲追薦会の準備会が催され自分は久振りで諸先輩にお目にかかった。(佐藤)²³」とある。一九二〇年一月三日のことである。小川は日本医師協会の評議員でありつづけ、のちにはその理事長にもなった。

『刀圭新報』は一九二二年九月に廃刊となり、日本医師協会は一九二二年一〇月から機関誌『医談』(第二次)を発刊した。第二次『医談』の編集兼発行人は山崎佐で、内容で歴史にふれているのは三分の一ぐらいか。奨進医学会の記事もとくにでる。第二次『医談』は一九二九年一二月の第六巻第一二号でおわり、つづいて一九三〇年三月から『日本医師協会雑誌』がだされるが、巻号数は『医談』をひきついでいる。編集兼発行人は山崎佐。内容に歴史に関するものはほとんどみられないが、奨進医学会よりの協同の精神をうけついでいる、としていた。

ところで、一九一七年に『中外医事新報』の経営は原田貞吉から富士川、藤井秀旭、竹内薫平、小田の四人にうつっていた。医学史に関する論文はこの雑誌にかなりのせられていた。一九二七年一月に日本医学学会が設立されると、

『中外医事新報』は一九二八年一月からその機関誌となった。奨進医会の医史学の面は一時期看板だけになっていたが、日本医史学会設立によって再確立されたのである。

四、暉峻のその後の活動

ここにいうのは、もちろん、医学史探究面での活動である。

暉峻が『刀圭新報』をさったおなじ年一九一九年の七月に『医人』が発刊された。この「発刊の辞」²⁵には、「吾々は、多く語る必要を認めない。唯、一こと云っておこう。吾々の唯一の味方が『眞理』であることと、吾々の飽くことを知らない強烈な征服欲が、最も徹底した形式によつて『眞理を裏切る医人』の頭上に加へらるることを」とあつて、『刀圭新報』でみせた戦闘性・批判精神がうけつがれていることがわかる。発行所は東京市下谷区池ノ端仲町十六番地医人社、発行兼編集者は同番地小川方の暉峻で、原稿届先は東大生理学教室の暉峻となっている。第一号に永井潜が「赤門を出んとする諸子に」をかいている。全体の内容を見ると、富士川の連載「温古史料」、小川の連載「続刀圭閑話」ほか医学史に関するものが三分の一ほどか、暉峻時代の『刀圭新報』よりもおおい。そのほかの執筆者をみると、村田、佐藤、朴澤進、大森憲太、角尾晋、蘆田元也、岡崎昌など、医科大学卒業時に暉峻の同級生だった人が中心である。村田は、²⁶「こんな具合で借家は不便だから独立して雑誌を出そうではないかと暉峻が提案し小川（劍三郎）さんが会計の方を引き受けられ、いよいよ『医人』と云う月刊誌を出し暉峻が編集し同級生（中略）を糾合し医界刷新の陣営を張った」とかいている。

一九二〇年三月発行の第九号は「本邦外科始祖華岡青洲号」で、一九一九年一〇月三十一日に奨進医会によりおこなわれた華岡青洲先生第五百十年記念祭および贈位祝典の演説および記事、計三八ページを付録している。最後の「列席者氏名」は宴会のそれらしいが、来賓の石黒男、華岡雄太郎、華岡青洋、佐藤男など、会員の尼子四郎、富士川游、呉秀

三、小田平義、小川劍三郎など計四四名のなかに、村田、佐藤、大森、暉峻、岡崎と、「医人」同人というべき五人の名がみえる。「編集雑記」をおしてみると、このときの会の準備にあたったのが、この人たちだったらしい。一九二〇年一月三日小川宅での医家先哲追薦会準備会で奨進医会の先輩にあつた、との佐藤の証言はさきにあげた。どうも、奨進医会の実務は、手をひいたはずの「小川氏を始め新進の方々」が、なおかなりになっていたようである。

「暉峻が『医人』第七号の「編輯雑記」に華岡青洲記念会につきしるしているなかに、こうある、――

○晚餐のときに、石黒男が過去に於ける奨進医会の業績に対して感謝の語があつた。いろいろと沢山な現象のなかから、善いものをあげ、眞なものを採み出して、人間の教養に資して行かうとする奨進医会の主張は今後ますます医人社同人によつて負担されてゆかねばならぬ。

この頃の『刀圭新報』に奨進医会および医史学に関する記事がほとんどないことと対照的である。

この『医人』も四月発行の第一〇号をもつておわる。この号は「第二年・第拾号」とついているが、第二年にはいつている通巻第一〇号の意である（一九二〇年一月発行の第七号から「第二年」がつき、第八号もおなじ、第九号にはついていない）。またも村田(28)によると、「小川さんと暉峻との間に編集について意見の衝突が起り一年もたゝないうちに廃刊してしまつたのは残念であつた」。この意見衝突の内容はわからない。さきに「戦闘性・批判精神」とかいたが、『医人』は暉峻時代の『刀圭新報』よりずっとおだやかになつてゐる。小川が暉峻をおさえていたが、どちらかがそれに我慢できなくなつたということであるまいか。

こののち『医人』同人はそれぞれの道に専門家としてあゆみだし、医学史に集中してたちもどることはなかつた。かれらが医学史へのあつい思いをいだきつづけていけば、日本の医学史研究はもうすこしちがつた様相をみせていたかもしれない。

一九二五年『労働科学研究』第一巻第四号にかいた論文「労働科学に就て」（その二）で暉峻は労働科学研究の史的考

察をおこない、「学の史的研究の主要さ」を強調した。三浦は暉峻のこういった史的関心に、富士川らとの交渉があったことの影響をみている。

さて、日本医史学会は一九二八年二月九日にハーヴェー三百年記念会を中山文化研究所で開催し、永井潜が「ハーヴェーを憶ふ」の、暉峻が「ハーヴェーの遺著について」の講演をした。このとき暉峻は富士川にいわれて「ゲッチンゲン医史学文庫について」の論文をかいていたが、これは戦後になって『労働の科学』第一九巻第四号、同第六号（一九六四年）、第二〇巻第五号（一九六五年）に発表された。一九三六年に暉峻訳によるハーヴェー『血液循環の原理』が岩波文庫の一冊として出版された。訳者序文には、「倉敷労働科学研究所は昭和十一年七月を以てその第一五周年を迎へた。この機に於て、立派な生涯をもつた科学者の偉大な業績を追慕することは、蓋し吾々の生活と使命とに関する反省と自照との最善の方法である。そしてこれこそ、この邦語訳を企図した直接の動機ではある」とある。なお、これは一九六一年に改訂版が出され、そのさいの表題は原典にしたがって『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』とあらためられた。

暉峻は一九四三年一月一二日山崎佐新理事長のもとでひらかれた日本医史学会役員会で、評議員に委嘱されることがきまつた⁽³⁰⁾。そして、すくなくとも一九五五年までは日本医史学会評議員であつた（こののち一九六七年までの役員名簿がうしなわれている）。

日本医史学会が今日あるのは、かなり多くの先輩たちの、ときには意外な因縁があつたのよることを強調して、この小伝の結びとしたい。

この論文の要旨は、一九九九年五月一六日、第一〇〇回日本医史学会総会（酒井シヅ会長）で報告した。論文執筆にあたり、労働科学研究所所長小木和孝氏のご教示をいただいた。

文献

- (1) 三浦豊彦「暉峻義等 労働科学を創った男」(シリーズ・民間日本学者)、リプロボート、東京、一九九一
- (2) 三浦豊彦「難波抱節旧蔵『温知堂文庫』について」『日本医史学雑誌』三六卷一、六三〜六五頁、一九九〇
- (3) 暉峻義等「僕を語る―暉峻義等対談抄」(三浦豊彦)『暉峻義等博士と労働科学』五七〜一〇四頁、暉峻義等博士追憶出版刊行会、東京、一九六七
- (4) 暉峻義等「巻頭語 編輯を担当するにあたりて」『刀圭新報』九卷五号、一二七〜一二九頁、一九一八
- (5) 暉峻生「編輯のあと」『刀圭新報』九卷五号、一五六頁、一九一八
- (6) 小川劍三郎「医学上に於ける国字国語使用に就いて」『刀圭新報』九卷五号、一四三〜一四五頁、一九一八
- (7) 「奥付け」『刀圭新報』九卷五号、一九一八
- (8) 藤浪鑑「學術と国民と国語」『刀圭新報』九卷六号、一五八〜一六〇頁、一九一八
- (9) 村田正太「医界用語問題」『刀圭新報』九卷七号、二〇一〜二〇五頁、八号、二三七〜二四一頁、一九一八
- (10) 大澤岳太郎「医界用語問題」『刀圭新報』九卷九号、二五二〜二五六頁、一九一八
- (11) 村田正太「前号所載『医界用語問題を讀んで』^(マ) 大澤教授の明答を求む」『刀圭新報』九卷一〇号、二九〇〜二九六頁、一九一八
- (12) 村田正太「東京医科大学受験用語に就て」『刀圭新報』九卷一二号、三三八〜三四一頁、一九一八
- (13) (3) に同じ。
- (14) 上肥鵬軒「便毒の語の出处に就て村田学士に答ふ」『刀圭新報』一〇卷四号、七〇〜七二頁、一九一八
- (15) 暉峻義等「編輯のあと」『刀圭新報』九卷六号、一八九〜一九〇頁、一九一八
- (16) 暉峻義等「編輯のあと」『刀圭新報』九卷七号、二二二頁、一九一八
- (17) 暉峻義等「編輯のあと」『刀圭新報』九卷八号、二四八〜二四九頁、一九一八
- (18) 義塔生「編輯のあと」『刀圭新報』九卷一〇号、三〇五〜三〇六頁、一九一八
- (19) 暉峻義等「編輯雜記」『刀圭新報』一〇卷四号、八五〜八七頁、一九一八

- (20) (19) に同じ
- (21) (19) に同じ
- (22) (山崎佐編纂) 「医家先哲追薦会四十五年日本医師協会創立二十年記念特輯」『日本医師協会雑誌』一三卷二号(一〇号、付録、一九三六、一三卷二一、付録、一九三七)
- (23) 村田正太「暉峻と私」『暉峻義等博士と労働科学』一一四(二〇頁、暉峻義等博士追憶出版刊行会、東京、一九六七)
- (24) 「編輯雑記」(佐藤) 『医人』第二年第八号、二〇四頁、一九二〇
- (25) 「発刊の辞」『医人』創刊号、一頁、一九一九
- (26) (23) に同じ
- (27) 「編輯雑記」(暉峻) 『医人』第二年第八号、二七二頁、一九二〇
- (28) (23) に同じ
- (29) (1) 一四一頁、一九九一
- (30) 「役員会」『日本医史学雑誌』一三二二号、一〇二頁、一九四三